

II ブラジル人のものの見方

多種多様な人種民族の複合国家だから、一口に規定は出来ない。しかし、移民の寄合いという点で、夫々の民族の個性が強張されて表面化するものと、同化されるものがある。表向き人種差別のない社会環境、寄合いでありながら、夫々の民族のもつ文化を尊重しつつ、大地の育む、ブラジル文化の創造への道は開けている。

第二次大戦末期、イタリー移民は、母国が降伏した日、戦いが終わったとお祝した。ドイツ人は、戸を閉めて、家に引きこもった。日本移民は、泣きながら働いた。ブラジル人の好きな小ばなしの一つである。イソップ童話のキリギリスは、冬になって、蟻に“夏の間、貴方々の奏でる音楽で、よく働く事が出来た、さあさあ、どうぞ、お入りなさい。”と訳されている。そのくせ、間違っても“Sorry”を絶対に言わない人達。

家族（親族）、仲間（鍋という言葉で表現）、教会の関係、という人間関係を大切に。共同体とでも言ったらいいと思う。個人が優先するので、愛社精神などは、彼等にとっては理解の外だ。会社を出れば、社長も友人になる。アミーゴというのは、心許せる友人のことである。

ラテンのもつ天性の明るさ、卒直、寛大、親切の反面、プライドの高さ、堂々としたあつかましさ、しぶとさ。大陸の人間ではある。

ポルトガル語を統一の一つのきずなにして、大陸の西側のスペイン語圏と区別し、ナショナリズム、愛国精神の高揚を計る。繰返された革命、悪性のインフレにもかかわらず強気な経済政策。民度・国民所得の差は、はげしく、それで居て、21世紀に夢をもつ若い国を、地球の反対側（裏側という言葉は彼らを刺戟する）に帰って考える時、日本の文化・社会との差に、やはり、はるかなる国の感を深する昨今である。

（1980. 1. 26 6回生）

40日間南北アメリカ縦断の旅

田中晶子

目的一未知への好奇心を満足させる事の他に、冒険が味わえる事、一人になる事。一人旅は目的であると同時に冒険の手段でもある。何しろ英語も不十分だけど38/43日はスペイン語圏の旅なのに全くできず、自他共に許す方向音痴ときている。

コースー可能な限り極に近い所から赤道を越え、逆迄迎る。高地と低地を経験する。宿泊地を北から順に書くと、フェアバンクス、アンカレッジ、バルディーズ（パイプライン終点であると共にコロンビア大氷河の海に流れ込む湾奥）、ラスベガス（グランドキャニオン）、メキシコシティ、メリダ、コスメル島（カリブ海）、パナマ、キト、グアヤキル、リマ、バラカス（ナスカ地上絵の近く）、クスコ、フリアカ（チチカカ湖）、ラパス、サンチアゴ、プンタマレナス（マジェラン海峡）以上である。

日程ー7/22～9/3 1980 マヤ・アズティカ、プレインカ・インカの遺跡巡りは能率を考え、ア

メックスのツアーに現地参加、言葉の通じない私は、時に親切を受け、時に孤独。

印象

気候の多様さを経験できる様コースを作ったが、結果的に環太平洋の北及び東縁に沿って飛んだ事になる。アリューシャン列島、マッキンレー、レーニエ、クレーターレーク、アコンカグア、オソルノ等機窓より凝視、ボボカテペトルは見えず残念、コトバクシ、チンボラソ、イリマニ、チャガタイヤ等は鉄道又はバスの窓より（又は地上より）、登れないのは口惜しいが、見えた事を感謝。一人最南端に向かう機は空いており左右に移動でき、太平洋の日没に、宇宙の中の地球を感ず。

体感温度の最低は、何と早朝のキト鉄道駅。同日、車輛の屋根に載せられグアヤキルに向かったトランクの中の温度計は42℃迄上りこの旅行の最高気温。この鉄道、二等は屋根上で荷物と一緒に。体感の最高はラスベガス空港夕刻の熱風、最多湿はパナマ、最快適はコロラド高原、緊張のせいかな有頂天のせいかな、移動のせいかな耐え難い気候環境は皆無であった。高度3800mのラパス、52°Sのプンタアレナスの冬はどんなに寒いかと恐れたが、いずれも10℃前後、勿論夜間はもっと酷しいだろう。

旅行中いつも窮地に陥り脱出しの連続。何しろツアー参加中でさえ、集合地についての注意をきき損い（英語の注意だっていうのに）迷子になったり（ピサックの日曜市、リマの観光バス、クスコの民族音楽のホールで）、二回にわたり全財産の入ったハンドバックを置き去ったりするのだから。

一人の時、文字通り“地獄で仏”の経験二度。予定外なのにふらふら行ったのがフェゴ島、フェリーは砂州の間を縫って到着。見物予定は何もなく、タクシーで町迄行き、巨大なビフテキを食べ、おかげでプエルトモントルに行き損う。明るくて佻びしく、砂浜に遊具があった。

ラテンアメリカでは独自の文化を持っていた地域の方が、豪華絢爛のカソリック寺院が目立つ。征服者達の力の誇示か、罪滅ぼしか、被征服者の財宝と血と汗で作ったのでは免罪にはならない。私にとって感動が大きいのは、マチュピチュ、ティワナコ、ナスカ、或いは多くのマヤ遺跡等である。インカ・マヤの末裔に幸あれ！

アラスカに始まる全行程に共通する事、日本製品の氾濫。OAS結成以来アメリカが、道を作り日本車が走る。カメラ・電気製品。誇らしく思う前に申し訳ない気がした。

保育園児・小4・小5の三人を、その父・祖母に託し、敢行した旅。無理の大きさと旅の喜びの大きさは比例したと思う。

（1980. 3. 29. 8回生）